

論文の和文要旨

論文題目

同伴者作家 B・ピリニャーク作品の革命
表象に関する研究——文明の黄昏に咲
いたロシア文化の花——

氏名

佐藤 貴之

ロシアは東洋であり、同時に西洋でもある。ピョートル大帝の治世以降、ロシア社会は西欧諸国の文物を盛んに受容し、絶え間ない西欧化を経験してきた。それと同時に、ロシアは十三世紀にモンゴル軍にカルカ河畔の戦いで大敗を喫して以来、アジアによる長い支配の歴史を持つ。タタール・モンゴルによる支配が与えた影響は議論を呼んだが、二世紀半にわたる支配の歴史が拭いがたい東洋的特徴をロシア文化に植え付けたことは確かである。結果的にロシアは多くの点で西洋と東洋を内に宿した大国となり、常に「ロシア性」の内実を探求する宿命を受けた。そして 1917 年の十月革命という歴史の大転換は、「西か東か」の文化的パラダイムを再考させる展望をインテリゲンツィヤに用意した。その中でも「革命の同伴者作家」と呼ばれたボリス・ピリニャークはロシア・アヴァンギャルドの芸術家たちが新世界建設の熱狂に沸いているさなか、ロシア文化の源流を求めて近代化以前の世界を探求した異色の作家である。その作品世界は、革命後の文壇で生じた歴史哲学上の議論を色濃く反映しており、東西の間で揺れ動くロシアの文化的アイデンティティを探るうえで重要な視点を提示している。

本研究ではピリニャークが作家として本格的に活動開始する 1915 年からスターリンの全体主義時代に入入る 1930 年の「偉大なる転換」までの時期を取り扱い、革命を通じたロシアの精神的再生を夢見たピリニャークの挑戦と葛藤を分析した。本論は以下の三章で構成されている。

第一章ではピリニャークが創作活動を開始する 1915 年から代表作『裸の年』が発表される 1922 年までの時期を取り扱い、「同伴者作家」と呼ばれたピリニャークの文化的・思想的・政治的背景に迫った。

第一章第一節ではピリニャークが革命前に発表した初期作品『完全なる生』、『彼らが生のひととし』、『死なるものがいざなう』、『雪原』を取り上げ、これらの作品に通底する作家の世界観を明らかにした。

第一章第二節ではピリニャークが脚光を浴びた 1920 年代前半の社会における思想的背景に迫った。中でもドイツの哲学者 O・シュペングラーの文明論に着目した。西欧社会で話題となったシュペングラーの『西洋の没落』はソ連と亡命ロシアでも少なからぬ追従者を見出し、草創期のソビエト作家に大きな影響を与えた。従って、ロシア思想界におけるシュペングラー論を分析し、その歴史哲学が革命後の社会で受容された過程を紐解いた。

第一章第三節ではシュペングラーが初期ソビエト文学に与えた影響を分析した。一世を風靡したその文明論は N・エレンブルグ、A・プラトーノフ、A・H・トルストイ、そしてピリニャークの作品に確かな足跡を残した。ここではそれぞれの作品におけるシュペングラー・テキストの特徴を考察した上で、ピリニャーク作品世界との連動性を検証した。

第二章では革命期のペトログラードで興ったサークル「スキタイ人」の活動がピリニャークに与えた影響を考察した。スキタイ主義は革命を支持したとはいえ、反共の思想運動だったことから、ソ連時代には研究が一切行われなかった。近年では B・ベロウース、Я・レオンチエフが中心となって再評価活動を行い、革命期ペトログラードにおける文芸活動の全貌を明らかにする上で重要な業績を残している。従って、本論ではこれらの研究を土台としてスキタイ主義の運動がピリニャーク作品に与えた影響を明らかにした。

第二章第一節ではピリニャークの作品や書簡、同時代の評論をもとに、スキタイ主義を牽引した作家たち（ブローク、バールイ、レーミゾフ、ザミャーチン）との関係を検証した。

第二章第二節ではスキタイ主義における十月革命受容の問題を取り扱った。革命後のピリニャーク作品では「始原力」という概念が重要な役割を担っているが、その概念にそもそも着目したのはスキタイ主義の作家たちである。そのため、まずは「始原力」の概念がロシア文化史の中で形成されてきたプロセスを俯瞰し、その象徴性を明確にするとともに、スキタイ主義の芸術運動において「始原力」が果たした役割を検証した。

第二章第三節ではスキタイ主義の影響を受けて執筆されたピリニャーク作品『酔いどれ提督ピーテル陛下』、『サンクト・ピーテル・ブルフ』、『裸の年』を取り扱い、その歴史哲学を明らかにした。

第三章では 1924 年から 1930 年の間に執筆されたピリニャーク作品を扱った。この時期はその実験文学が創作上の危機に陥った時期である。1920 年代後半にかけて国家的文化統制が勢いを増す中で、ピリニャークは時代の流れに逆行し続けることができず、「鋼鉄のロシア」を築き上げるスターリンとの対話を試みるが、この時期の作品を分析することで、革命の運命を見極めようとしたピリニャークの挑戦と葛藤が明らかにした。

第三章第一節では『裸の年』による輝かしい成功の後に訪れた創作上の危機を分析した。その例として 1925 年に発表された長編小説『機械と狼』は数々の否定的な評価を呼び、作家の評価を著しく低下させる結果につながった。したがって、まずは作家の実験文学を取り巻いた議論を俯瞰し、作家に向けられた批判の特徴を分析した。

第三章第二節では作家の評価を著しく低下させた問題作『機械と狼』を分析し、その作品を貫く歴史哲学論争に焦点を当て、東洋と西洋の間で揺れ動くピリニャークの葛藤を明らかにした。

第三章第三節では訪日後に執筆された『日本印象記』を取り上げ、ピリニャークの歴史哲学上で占める位置付けを明らかにすると同時に、その来日が作家の歴史観に与えた影響を考察した。

第三章第四節では『消せない月の物語』発表後に作家の身に降りかかった政治的圧力を分析し、左翼芸術への接近を記述した。具体的には『赤のソルモヴォ』、『中央黒土地帯』、『ヴォルガはカスピ海にそそぐ』を取り上げ、全体主義時代前夜のピリニャークが抱えた政治的・文化的・思想的葛藤を明らかにした。

本研究ではこれらの分析から以下の結論を導き出した。

第一章で確認した通り、ピリニャークの作家人生は十月革命の歴史と密接に関連している。ピリニャークは十月革命における共産主義の影響を否定し、「民衆の反乱」として革命を理解した。革命によって滅んだのは帝政ロシアの国体であり、ピリニャークはロシアの大地に生きることの重要性を亡命ロシアの作家たちに説いた。

ピリニャークにとっての革命はロシアの原初的な文化を復権することであり、西欧文明に対する抵抗がその作品世界を特徴づけている。第一章第二節で確認した通り、革命後のソ連社会では『西洋の没落』が広く人口に膾炙し、シュペングラーの文明論は文壇にも大きな影響を与えたが、「西洋の没落」は同時に「東洋の夜明け」を引き起こすと考えられていた。ロシア民族の原点を探ろうとするピリニャークの探求心は、文化と文明の興亡を論じたシュペングラーの歴史哲学に支えられ、文壇の中で一つの大きな流れを為していったことを記述した。

そうした中で革命期のペトログラードで興ったスキタイ主義がピリニャークに与えた影響は決定的であった。第二章で確認した通り、ピリニャークはペトログラードの「スキタイ人」に倣って無政府主義的な作品世界をはぐくみ、アンチ・ペテルブルグ・テキストとも呼ばれる数々の作品を発表した。ピリニャークは革命を契機として

西欧的ではないロシア、アジア的なロシアの探求に乗り出し、文壇で大きな波紋を呼んだ。

ただし、ピリニャークの革命観はネップというロシア史の新たな段階を迎えて大きく変化した。作家の歴史哲学は過去を志向する逆行的な運動から、未来と過去、ソ連と中世ロシア、西洋と東洋の間を揺らぐ振り子の運動へと移行していく。まさにこの振り子のような運動が結晶したものが葛藤の文学『機械と狼』である。第三章で確認した通り、ネップ期のピリニャークにとって、革命は脱西欧化を通じたロシアの新たな民族文化ではなく、ソビエト文明の始まりとして受容され始め、それは同時に左翼芸術への接近にもつながった。『機械と狼』から『飛翔するロシア』への移行は、同伴者作家からプロレタリア作家への着実な転向に他ならない。

しかし、ピリニャークの中で機械のロマンチズムは長続きしなかった。第三章第二節で確認した通り、作家は再び「機械」と「狼」の間を振り子のように揺れ動き、十月革命が辿る運命の探究を自らの使命として課す。まさにその過程でピリニャークのまなざしは「日出づる国」日本に向けられた。ピリニャークは民族の歴史において決定的な役割を果たすのは物質文化ではなく、精神文化であることを日本で確認し、その文化は始原力の非合理的な原理から生じるというスキタイ主義の文化論に回帰していった。

作家は日本の近代化を通して始原力の重要性にソ連読者の目を向けさせようとしたが、来日中に祖国で発表された『消せない月の物語』はソ連社会を揺るがす事態となった。1928年にピリニャークが発表したルポルタージュ『赤のソルモヴォ』は政治的過ちを償うために執筆された感は否めない。ピリニャークは体制賛美のルポルタージュを執筆し、ソビエト社会を前に謝罪したが、それは「偉大なる転換」に伴う一大論争の序曲であった。

「偉大なる転換」前夜のモスクワではピリニャークをはじめとする同伴者文学と、文壇の左派が熾烈な論争を繰り広げた。国家的な文化統制の波が文壇に押し寄せ、ピリニャークを始めとする同伴者作家には「階級の敵」というレッテルが用意された。ピリニャークの歴史観は時代の流れに逆行し、それは社会全体を巻き込んだ論争へとつながっていった。

そしてこの論争を通して、ピリニャークは『ヴォルガ川はカスピ海にそそぐ』という大長編小説を執筆し、ソビエト社会に対する態度を明示するが、それは文学的自殺という道だった。ピリニャークの民族的な「ロシア」はスターリンによって文明化され、ロシア文化は葬られてしまった。ロシア文化の始原力は過ぎ去り、文明の時代が訪れたが、ピリニャークの言葉を借りれば、「ロシア的人間はロシアの始原力なしに生きることはかなわない」。ピリニャークが「偉大なる転換」の前夜に用意した文学的自殺は、ロシアの民族文化を探求し続けたロマン主義者の不可避的な帰結だったといえるに違いない。